

M. ヴェーバーの文化科学と価値関係論（下）

— M. ヴェーバーの科学論の構図と理念型論

— 多元主義的存在論の視点からの再解釈の試み — (その1) —

佐藤 春吉*

本論文は、M. ヴェーバーの社会科学論の構図を多元主義的存在論の視点から読み解き、理念型論の存在論的性格を明確にすることを目指した一連の研究の一部分である。その研究の成果は本論文を含む三つの論文で構成され、今後順次公表の予定である。ヴェーバーの理念型論に関する一連の私の研究は、2005年に本論集に掲載された価値自由論に関する論文「M. ヴェーバーの価値自由論とその世界観的前提—多元主義的存在論の視点による解説の試み」を引き継ぐものである。本論文では、ヴェーバーの社会科学論のうち、特に「文化科学」の概念の意味内容と価値関係論に焦点を合わせて、多元主義的存在論の視点からの解釈を試みたものである。文化科学は、文化現象がおびる意味と価値に焦点を当てた科学を意味し、その際中心的な意義を与えられているのがリッカートに由来する価値関係論である。ヴェーバーにとっては、価値関係論は、研究者の主観的価値理念と、客観的文化現象の価値との間を媒介するものである。本論文では、ヴェーバーとリッカートの価値関係論の違いを明確にし、ヴェーバーの文化科学の理解が、価値の独自の次元を承認しつつも、文化科学認識の客観性の規準を価値とは独立の次元において認めるものであることを明示した。この点は、リッカートの観念論的な価値哲学とは異なる实在論と親和的な経験科学の地平を切り開いているものである。ヴェーバーの科学論の構図は、「現実科学」というもう一つの科学概念との関係でさらに明確に理解されるのであるが、その課題は次の論文の課題となる。

キーワード：M. ヴェーバー，H. リッカート，K. マルクス，理念型，価値自由，社会科学認識の客観性，文化科学，価値関係，現実科学，因果性，多元主義的存在論，批判的实在論

目次

はじめに

〈M. ヴェーバーの理念型論と社会科学認識の客観性—本研究全体のねらい〉

〈「文化科学」ならびに「現実科学」と社会科学論の構図；理念型理解のために〉

〈文化科学と価値関係；本稿「その1」論文の主題〉

1. リッカートの文化科学と価値関係論

(以上、前号)

(以下、本号)

2. M. ヴェーバーにおける文化科学と価値関係論

2-1. 文化事象と文化意義および価値理念

2-2. 文化意義と研究者の価値観または価値関係

2-3. 時代の価値理念と問題設定の歴史の変遷

3. 暫定的結論と次稿の課題

* 立命館大学産業社会学部教授

2. M. ヴェーバーにおける文化科学と価値関係

前号（上）で述べたように、ヴェーバーの『客観性』論文における価値関係についての議論においては、上記のようなリッカートのな主観構成説に接近した叙述が散見され、社会科学認識の「客観性」ではなく、「主観性」が論じられている、との印象さえ生じさせる傾向が認められる。しかし、また、リッカートのな主観構成説から抜け出ている、あるいは抜け出る兆候を示す論述も明らかに見いだせる。『客観性』論文については、その後のヴェーバーの展開を見据えて兆候的、批判的に読むことが求められる。以下、ヴェーバーの価値関係論についてやや丁寧に見ていくことにする。

ヴェーバーは、「文化科学的考察方法の決定的特性」について以下のように述べているが、ここに、文化科学と価値関係論にかかわる主要な論点は一通り表現されている。

「われわれは、生活現象をその文化意義において認識しようとする学科を、『文化科学』と名付けた。ある文化現象の形成の意義、およびこの意義の根拠は、法則概念の体系がいかに完全となっても、そこから取り出したり、基礎づけたり、理解させたりすることはできない。というのは、そうした意義やその根拠は、文化現象を価値理念に関係づけることを、前提としているからである。文化の概念は、ひとつの価値概念である。経験的実在は、われわれがそれらを価値理念に関係づけるがゆえに、またそのかぎり、われわれにとって『文化』であり、文化とは、実在のうち、価値理念への関係づけによって、われわれに意義あるものとなる、その構成部分を、しかもそれのみを、包

摂するのである。その都度考察される個性的実在のほんのわずかな部分が、そうした価値理念に規定されたわれわれの関心によって色彩づけられ、そのみが、われわれにとって意義を持つ。それが意義をもつというのは、そのわずかな部分が、価値理念との結合によって、われわれにとって重要となる関係を提示するからである。それゆえに、またそのかぎり、その部分が、その個性的特性において、われわれにとって知るに値するものとなるのである」(OE, s.175, 82-3頁)。

要約すれば、以下のように表現できる。文化意義とその根拠は、価値理念への関係づけ（価値関係）を前提している。したがって、文化とは、経験的実在のうち、価値理念に関係づけられた意義ある部分のことである。この文化意義は、法則概念からは取り出せない。経験的実在の部分が、その個性的特性において意義を持つのは、それがわれわれにとって重要な意味ある関係を示すからであり、それゆえ、それは、われわれにとって知るに値するものとなる。

このヴェーバーの主張は、用語も論理も、一見する限り、ほとんどリッカートの議論との相違を感じさせない。しかも、『客観性』の各所に散見される、以下の検討で指摘するような不明確な点、誤解を導きかねない両義性も指摘できる。この曖昧さは彼がリッカートの議論を表現上もかなり忠実に踏襲した結果ではないかと思われる。しかし、ヴェーバー自身のその後の展開も見据えたうえで、注意深くこのテキストの錯綜した議論全体を検討すると、その曖昧さを克服していくヴェーバーの独自の志向が確認できる。ヴェーバーが展開している価値関係論には、その後の展開でいっそう明瞭になっていく論点と豊かな意味ある考察を認めることがで

きる。以下では、後の展開をも念頭に兆候的な読解を介在させつつ、ヴェーバーの価値関係論の独自の論理構造について検討しておきたい。すでに、先取りの見てきたリッカートとの違いも、そのなかで自ずと明らかになると考える。

以下では、錯綜する問題連関を意識的に二つの視点から考察していくことにする。まずは、上記引用を起点にして検討していくが、その第一は、「文化意義」や「価値理念」が社会事象としての客観的な存在性格との関係においてどのように扱われているかという問題である。『客観性』では、文化意義が、文化事象に付帯しているというあり方において研究対象であるという点がときに不明確であり、研究対象の文化意義そのものを研究者の認識主観が直接に付与するかのような理解を生み出しているからである。第二は、科学的認識における価値観点について、ヴェーバーの一貫した志向である個々の研究者がとる価値観点という主体的かつ主観的な性格を明確化する視点でテキストを再点検するという問題である。その際、この研究者の価値観点の主観的性格が理論的価値関係という意味での客観性とどのような関係にあるのかという問題が明確にされなければならない。この両方の論点との関係で、『客観性』で多用されている「われわれ」という主体者を示す言葉が、一貫して曖昧であり、「われわれ」とは一体誰なのかが不明瞭にされている問題が指摘される。しかし、社会関係の内部で人々が抱いている理念が文化事象に実践的に意味を付与する問題領域と、研究者の抱く価値理念や価値観点とを明確に区別すること、すなわち、実践的な意味付与と理論的な価値関係との違いを明確に区別することが、問題連関の解明のためには、ぜ

ひとも必要である。

やや長い前置きを挟んだが、先の引用にもどって、上記二つの視点から、それぞれ、ヴェーバーの『客観性』における議論を少し丁寧に検討することにした。

2-1. 文化事象と文化意義および価値理念

以下では、第一の論点、価値理念や文化意義と文化事象の対象的存在形態との関係をヴェーバーがどのように考えているかという問題を検討しよう。そのためには、やや迂回的に感じるかも知れないが、分かり易く、ヴェーバーの言う「われわれ」とは誰なのかという問題から考えてみよう。上の引用に関して、文化が価値理念に関係づけられて意義を与えられた実在の一部分のことだとして、この実在を価値理念に関係づけ意味を付与する「われわれ」とは、誰なのか、社会生活を営む人々なのか、研究者なのか、上記の引用では不分明である。後者であれば、認識主体である研究者が、研究対象に文化意義を付与するといった観念論的な解釈も可能になる。実際に、引用後半部では、この価値理念や文化意義への関係が、「われわれにとってもつ意義」、「われわれにとって重要となる」、「われわれにとって知るに値するものとなる」といったかたちで、明らかに認識関心と結びつけられていることによって、あたかも認識主体である研究者の価値観点設定が文化意義そのものを創出するような印象を生み出すことになる。また、別の箇所では、「実在のある構成部分が、われわれにたいしてもつ特定の意義」について、「実在の価値理念への関係づけが、当の実在に意義を付与するのである」(s.176, 84頁)といった表現もされていて、この印象はさらに強化される。しかし、「われわれ」が必

ずしも研究者を指しているのではなく、文化的価値理念を自ら抱き実践的に生きている社会的行為者たる人々のことであり、彼ら実践者が実在に関連に文化意義を付与すると読めなくもないのである。そして、『客観性』には、実際にこのような解釈を支持する言葉も少なくない。「いかなる文化科学の先験的前提も、……われわれが、世界にたいして意識的に態度を決め、それに意味を与える能力と意思とをそなえた文化人である、ということにある」(s.180, 93頁)という有名な言葉も、先の印象を引きずって読むと「われわれ文化人」とは、意識高き研究者のことであるかのように理解されかねない。しかし、ここでいう文化人を狭く研究者に限定して解釈するには明らかに無理がある。それは、すぐつづけて述べられている次の言葉を見れば明瞭になる。「われわれは、人生において、人間協働生活の特定の現象を、この意味から評価し、そうした現象を意義あるものとして、それにたいして（積極的ないし消極的に）態度を決めるのである。そうした態度決定の内容がいかなるものであろうとも、一この現象が、我々にとって文化意義をもち、この意義によって初めて、その現象が、われわれの科学的関心を引くのである」(s.180-1, 93-4頁)。ここで、人生において、協働生活にたいして、評価し、態度決定をして、価値と意義とを付与しているのは、明らかに、研究者ではなく、われわれすなわち社会的実践者たる人間（人々）である。研究者はこの意義づけられた現象にたいしてあらためて科学的な認識関心を向けるのである。科学的認識を追求する研究者が態度決定することはヴェーバー的には価値自由違反であるし、価値判断と区別されるべき理論的価値関係を堅持すべき研究者が行うことではありえない。文化意義

を付与する主体が社会的実践主体であるとすれば、文化意義は社会的協同的な事象であり、研究者の観点で創出できるようなものではない。ここで、この点に疑問の余地はないと言えよう。ただし、ここでも、同じ論旨の隣接した文章のなかで、「われわれ」が、生活者である人間の意味でも、研究者（認識主体）の意味でも使用されていることから、その不分明さが生じている。

『客観性』で多用される「われわれ」が、誰であるかという問題は、第二の論点にも直結する問題だが、ここでは、「文化意義」やその根拠である「価値理念」が人々の実践を介して付与される形で文化現象に客観的に付帯しているものなのか、または研究者がいだく主観的価値理念によって初めて成立するものなのか、という点だが、さらに検討されなければならない。ヴェーバーには、既に示したように価値観の設定によって、初めて対象に文化意義が付与されると解される章句があるが、さらに対象の特定の性質までが付与されるかのような叙述箇所があって、研究者の価値観が対象を創造するとか、文化意義を付与するといった解釈を補強するものとなっている。「ところで、ある事象の『社会—経済的』現象としての性質は、その事象それ自体に『客観的』に付着している、といったものではない。そうした性質はむしろ、われわれの認識関心の方向によって制約され、この方向は、われわれが、個々のばあいには、当該の事象にいかなる文化意義を付与するかによって決まる」(S.162, 56頁)。ここでも、「われわれ」とは誰かという問いは重要だが、「認識関心」が主題になっていることからすれば、研究者だという解釈の方に理があるように見える。私には、これはヴェーバーのその後の思想展開に照

らして、リッカートの主観的構成論に引きずられた行き過ぎの表現によるミスリーディングであると考え。ヴェーバーの社会科学認識の客観性の論証は、本研究全体で行うことだが、ここでは、ヴェーバーの思考を正確に理解する上で重要な以下の点だけ指摘しておく。社会経済的性質が観点に依存しているとして、ヴェーバーがここで論じていることは、実際上は「経済的現象」と「経済を制約する現象」、「経済に制約された現象」といった、認識関心や観点によって区切られる境界がやや流動的な研究対象の境界設定のことであり、それ自体は、対象の性質そのものを創出するような意味をもつものではない。さらに、ヴェーバーの議論を注意して読むなら、慎重にも、諸事象を「経済的」諸事象として特徴付ける客観的な事実連関が、あわせて提示されていることに気がつく。それは、経済的現象に結びついている「根本事態 (der grundlegende Tatbestand)」と呼ばれているものである。ヴェーバーが指摘している「根本事態」とは、人間の肉体的生存または理想的欲求の充足のために必要な諸手段の量的質的欠乏と、その充足のための計画的な配慮、労働、自然との闘い、および、そのために人間同士のゲゼルシャフト結合が必要とされている事態、のことである (OE, s.161, 55-6頁)。経済的現象は、こうした根本事態に関連して形成されている社会諸関係を意味している。それは、研究者の観点次第で決まるようなものではなく、客観的に成立している人々の実践的諸関係を意味する「根本事態」という客観的な指標によって規定されているのである。ヴェーバーがここで認識関心によって対象設定が区切られるとして論じていることは、それらの経済的諸事象は客観的指標に関連づけられたものである

が、それらは非常に複雑多様な連関において展開されているので、「経済的現象」、「経済を制約する現象」、「経済に制約される現象」といった区分づけが必要であり、その区分そのものはそれらの現象をどのような観点から問題にするかによって流動的であるということなのである。とはいえ、見てきたように、『客観性』では、観点と価値関係、価値理念、文化意義の関係が不分明で誤解を誘う表現で語られていることは確かである。

しかし、『客観性』での議論をさらに詳細に検討するならば、上記のような主観主義的な構成説の印象とはまったく異なるヴェーバーの声が各所で聞こえてくるのである。

「われわれにとって重要なのは、交換が今日大量現象になったという歴史的事実の、他ならぬその文化意義を分析する課題である」(OE, s.176, 85頁)とヴェーバーが言うとき、文化意義は研究者が付与するのではなく、研究において研究者が分析すべき客観的な対象とされている。また、その文化意義は、大量現象となっている交換という特徴的な客観的社会関係に付帯している意義である。

「われわれが追求するのは、歴史的な、ということはその特性において意義のある (in ihrer Eigenart bedeutungsvoll)、現象の認識に他ならない」(OE, s.177, 86頁)と言うとき、意義があるのは特定の現象の「特性」なのであって研究者がその特性を創出したりするのではないことは明らかである。ちなみに、「その特性において意義ある特徴」(OE, s.192, 115頁)といった表現は、各所で使用されているヴェーバーお気に入りの表現である。

さらに、「現行の法規範が、形式上同一であっても、規範によって律せられる法関係の文化

意義と、それにもなって規範そのものの文化意義も、根底から変化するばあいがある」（OE, s.183, 97頁）と言う主張をみれば、文化意義は研究者の価値観が設定するものではなく、研究者の背後で客観的な社会諸関係によって形成され変化するものであり、研究者はむしろそれをあらためて研究対象として解明すべきものとみなされていることは明らかである。

さて、この考察の最後に、私は、ヴェーバーが文化価値や価値理念を客観的事象のうちに位置づけていることが、単にあれこれの断片から伺えるということではなく、ヴェーバーの独自の理論展開にとって死活問題となる理念型論の問題連関のなかで論じられていることを示したいと思う。理念型について、詳しくは、本研究の主題として、後に続く「その3」論文で中心的に論ずることになるが、ここでは、行論との関係でのみ触れることにする。

ヴェーバーは、『客観性』論文の後半部で、理念型概念を論じるなかで、「理論と歴史の混同」の危険性について詳細な議論を展開している。理念型概念を明晰に仕上げることの目的の一つは、このような混同を回避することにあつたといってもよい重要な論点である。そこで、ヴェーバーは、「時代の『理念』」について触れ、それは「その時代の文化の特性に、構成要素として、重要な作用を及ぼした」と述べ、この実在連関のなかで機能しているあるいは機能した価値理念と、その関係をとらえる理念型概念との厳格な区別の必要に説き及んでいる（OE, s.194-5, 122-3頁）。そこでは、「一方に、歴史的に確認できる、人間を支配する理念があり、他方には、当の理念に対応する理念型が抽出される、歴史の構成部分があつて、両者の間には、因果関係が、もとよりさまざまな姿をとって、

形成されている」ので、それらの混同の危険が大きくなるという警告が述べられている（OE, s.196, 124-5頁）。ここでは、この価値理念が実践的社会関係において実在的な因果連関を構成しているというヴェーバーの認識に注意を促したい。しかも、この実在的諸関係の内部の価値理念がある種の因果的な作用力をもつというヴェーバーの理解は、多元主義的存在論の見地から非常に重要な論点であるが、ここでは、その実在領域の価値理念と研究者の価値理念との間に一定の関連があることを認めつつ、だからこそ両者の混同の危険を戒め、区別すべきことを、ヴェーバー自ら明確に主張していることが重要である。同様の脈略で、ヴェーバーは、国家概念にかかわって、両者の混同の危険について論じている。「学問上の国家概念」は、「われわれが特定の認識目的のために企てる一つの総合である」。しかし、「国家概念は、歴史上の[人々の]頭脳のなかに見いだされる不明瞭な総合のなかからも抽出される」が、それが、「同時代人によってなされる仕方」は、「著しい実践的意義をそなえている」ので、「実践的理念と、認識目的のために構成された理論的理念型とが、並行関係にあつて、たえず相互に移行し合いがち」になると、指摘し、その混同の危険に警告を発している。ここでは、研究者の学問的な概念構成における観点と、実践的な領域での実践者による理念的な意味付与とが明確に区別され、こうした実践的な理念を帯びた社会諸制度について、研究者はそれとは相対的に独立に独自の明確に自覚された観点をもって研究すべきことが強調されているのである。

このように見てくると、ヴェーバーが、リッカートにはない経験科学における独自の概念形成論を理念型論として展開していくなかで、対

象世界における文化意義や価値理念を明確に客観的事象の世界に据えると同時に、これとは区別される研究者の価値理念や価値観の独自性を明確にすることが死活問題となっていたことが分かるだろう。もともと、認識対象を認識主観が創出するというような主張は、概念と実在の混同を批判するヴェーバーの立場からしてありえないことである。

なお、ここでの文化意義についての議論が、後に全面展開されるヴェーバーの理解社会学との関係で、どのような発展の意味を持ちうるかについても、指摘しておきたい。ヴェーバーの理解社会学は、一方では、行為の意味と客観的に制度化された意味、他方ではその意味を担う行為と実在的諸関係の因果連関について、理解的に解明するという目標を掲げている。それとの関係では、文化意義は、社会的諸事象がもっている文化的な、価値や意味を付帯した諸要素、諸様相、諸特徴のこととしてとらえられるだろう。それは、社会生活のなかで、自ら意味と価値を実現しようとし、意味ある行為や諸成果を社会的現実において作り出そうとする人間たちの活動によって生み出され、形成されたものである。したがって、それは、社会的諸関係の実践的担い手たちによって理念的に抱かれ、現実の諸事象のなかに存在して（あるいは付与されて）いる意義である。この意義は、人間の産物であると同時に、人間によってのみ理解され、評価されるものである。この文化意義はそれを体現する制度や行為とともに、社会科学の研究対象になる。ヴェーバーの文化科学における価値関係論の方法論的探究は、リッカートの価値哲学よりも、客観的な文化事象の意味理解の方法を開拓したデイルタイを受容する方向をとったと考えられる。多様で豊富な文化事象

の客観的に形成された意味を理解的方法で分析することが、ヴェーバーの理解社会学の核心である。ここで、付け加えるならば、ヴェーバーの理解社会学は、意味理解の方法とともに、実在的因果連関の把握というもう一つの方法がつねに組み合わされている。因果連関の分析こそ、ヴェーバーのもう一つの科学規定である「現実科学」の核心をなしている。ヴェーバーの現実科学と因果連関の問題は次稿の中心的テーマとなる。ともあれ、ヴェーバーにとって、社会的現実とは、意味連関と因果連関の二重物なのである。

『客観性』では、デイルタイの文化事象の意味解釈の方法は、まだ十分自覚的なかたちで高く評価されていないけれども、すぐのちの『ロッシャーとクニース』のクニース論文でレントやミュンスターベルクを論じた部分では、「理解的解明」の方法の彫琢の必要を自覚したヴェーバーの重要な考察テーマになっている。しかし、『客観性』でも、この意味で注目される発言が見い出せる。ヴェーバーは、「社会心理学」（この語で、ヴェーバーは、明らかにデイルタイ的な意味理解の方法を念頭に置いている）の意義と限界についてふれたところで、次のように述べている。「心理学的分析は、……社会制度の歴史的な文化的被制約性と文化意義との認識を、……きわめて価値ある仕方ですめることを意味する」（OE, s.189, 109頁）

このような記述からすれば、文化意義は文化科学の研究対象であり、文化意義の認識のために理解的方法を駆使していくという、後のヴェーバーの展開方向がすでに示唆されていることが分かる。こうした方向は、当時のリッカートにはなかったものであり、ヴェーバーの独自の理論展開の選択だったのである¹⁵⁾。文化事象の

研究方法として理解的方法を明確に採用すればするほど、価値や意味は研究者が押しつけるものではなく、文化事象のなかで探求されるべき研究対象という性格をいっそう強く備えることになる。先に参照したリッカートの、彼の方法論の枠組みの内部で、文化意義について理解的解釈学的方法で研究することを容認する議論を展開しているが、これはむしろヴェーバーを後追いした結果とみなしうるものである。また、ヴェーバーは、リッカートのように、すべてを価値哲学に収斂させるような哲学的な指向性はまったく持っていない。彼は、人間の行為とその諸関係が担う内容豊かな文化意義を、その内容において理解することを社会科学的認識の目的に据えている。リッカートの場合は、結局、内容的意味の理解よりも一切の文化意義を形式的な価値概念に回収することに関心があった。この違いは、目立たないが非常に大きい。ブルーンは、ヴェーバーが最初期から、リッカートの「価値関係」の概念や価値哲学に一定の批判的見地をもっていたことを示す、ヴェーバーの手記（Nervi fragment）の次のような言葉を紹介している。

「リッカートが、『我々が、歴史の主題になるどんな対象も価値に関係していなければならないと言ったとき、我々は実際、歴史家が叙述すべきことはどんなものも、興味深く、特徴的で、重要なまたは意義深いものであるべきだという、ごく平凡な真理を、論理的な用語に言い換えているにすぎない』と言うとき、より公平に次のように言うてよいだろう。すなわち、我々は、そこで、受け入れられる平凡なしかし完全に理解可能な用語の代わりに、誤解を招く可能性のあるもっとも危険な動揺する両義的な表現を得ているのだと。……しか

し、リッカートの『価値』という概念をどんなに揺すぶってみても、出てくるものは、『知るに値する』ということだけである。したがって、価値への関係づけの必要性は、一見したところ平凡に見える、歴史は、経験的实在の知るに値する部分を叙述すべきだという命題に還元できるのである」¹⁶⁾。

このヴェーバーによる、リッカートの「価値関係」や価値という概念の使用についての問題指摘は、ヴェーバーが、リッカートの経験科学の問題を価値哲学に回収する傾向に対して批判的意識をもっていたことを推察させると同時に、対象的文化事象の意味内容の分析を、理解的方法で進める一方、研究観点の意味での価値関係を、「知るに値する」という意味の研究者による研究対象の選択に限定する方向で、この問題を考えようとしていたと推察されるのである。ヴェーバーは、あくまで価値自由の精神で経験的研究を合理的に推進するための方法論を彫琢することを目指していたと考えて間違いないといえよう。

『客観性』では、ヴェーバーは、対象的で客観的に存在している文化意義は、実在的諸関係に結びついていたとしても、これを認識する際には、主体の側の独自の関心抜きで対象のたんなる観察から一義的にその意義を「引き出し」確定することができないという、確かに正しい側面に最大の注意を向けていた。仮に対象化され実在連関において機能的な関係にあらうとも、この価値や意義を概念的に把握し確定させようとする場合には、これを意義あると解釈する主体抜きには確定できない性質のものである。この認識主体の問題設定や関心によって、多様な現実の一定のその特性によって意義のある部分

が選択され認識対象となる。その限りでは、知るに値するという価値づけは認識主体に基づく。しかし、その場合、知るに値するとみなす認識者の認識関心を触発する意義ある特性は対象の側に存在する。その間に関係があるとしても両者は同一のものに還元されえない。こうした事情が、彼の説明を複雑にしていると解される。

『客観性』論文のすぐ後に書かれた『マイヤー批判』論文では、文化意義や対象の価値は、それ自体が非常に多面的であること、それらは、価値解釈によって、理論的分析的に評価され理解的に解明されるものであることが明確にされ、価値解釈の方法が主題的に議論されている。したがって、それらの文化価値または文化意義は、対象的に観察されるべき客観的な性格を有していることが、以下に見るように、いっそう明白にされている。ヴェーバーは、この論文で、歴史の研究では、個性的な因果連関の認識の対象となる歴史的個体が特定の観点から知るに値するということが、その文化意義の分析によって確定されている必要があるとして、以下のように述べている。すなわち、文化意義の分析によって対象設定を行う必要があるということは、「われわれが、このような対象として、たとえばすべての近代的文化、すなわちヨーロッパに端を発するわれわれの文化、現代の段階においてはキリスト教的・資本主義的・法国家的文化を仮定する時にも、同様である。それゆえまた、それは、ありとあらゆる観点の下でこのような文化として観察される文化諸価値の巨大な一つの糸玉なのである」(KS, s.257, 163-4頁)と。このように、ヴェーバーにとって、文化諸価値は歴史的な形成体において对象的なあり方をしており、しかも、それ自体が多様な関

係性のなかに置かれ複雑な錯綜した諸価値や文化意義の巨大な「糸玉」を形作っているのである。そして、まさにこの諸価値の多様性のゆえに、研究者の観点設定には多様な可能性があり、またそのことが研究者の研究の自由を保証しているのである。しかし、それら多様な諸文化意義は認識主観が押しつける意義ではなく、認識主観によって観察の対象となり、分析の対象となるような歴史的な諸関係によって形成された客観的な諸意義の錯綜した複合体をなしているのである。

以上のことから、ヴェーバーの価値関係論は、認識主観が対象に価値や意義を付与するというものではあり得ない。価値を付与するのは、研究者とは別の社会的実践的主体者たちであり、研究者の価値観点は、これと媒介的に関係しているとしても、あくまで研究者が主体的に設定するものであり、この観点から文化事象の知るに値する特定の側面が研究対象として選り取られるのである。以上、研究対象としての文化意義の側面に焦点を当てることによって、ヴェーバーの両義的で不分明な表現の背後に、後にいっそう明確になる以上のような主観と客観の対象との区別の論理が明白に見て取れるということが確認できたと考える。

2-2. 文化意義と研究者の価値観点または価値関係

さて、次に、第二の論点、研究者の価値観点を明確にしたうえで、それとの関係で研究者の価値理念や理論的価値関係がどのように位置づけられるのかという問題に移ろう。

『客観性』では、認識対象の設定において認識主体の価値観点が必要となること、この観点が主観的なものであることが、何度も強調され

ている。ここでも、この価値観点について、主体者が「われわれ」と表現されて、リッカートの「意識一般」のような一種非人称的な性格の印象をもたされているために、その性格が不分明である。本節冒頭に示したヴェーバーの表現は、価値観点を据える研究者個人の個性的な問題関心や価値観点の個性とその重要性について判然としないという印象をぬぐえない。しかし、研究者の明晰な観点設定の問題は、経験科学の概念彫琢をめざすヴェーバーにとって最重要と言ってもよい問題であり、注意深くみれば、『客観性』においてもこの点についてかなり明確な議論が存在する。以下、まずはこの点を確認していくことにする。

『客観性』では、特定事象をある特定の観点から選択し、一面性において研究することが、社会科学にとって、必要かつ不可欠であると、繰り返し力説されている。「歴史的なものをめづらば、経済的に解釈することの『一面性』と『非現実性』は、およそ文化的實在の科学的認識にまったく一般的に妥当する原理の、一例にすぎない」。しかも、「この点を論理的基礎と方法上の一般的帰結について明らかにすること」が、「この論究の主要な目的である」（以上、OE, s.170, 72頁）とされている。科学的認識が一面性をもつことは、ヴェーバーにとって欠点などではない。それは、前回論文で示したように、「価値観点の神々の黄昏」をもたらし、認識を法則認識に一元化する傾向や、本質主義的な全体性の認識を標榜する流出論理的な科学観への徹底的な批判に根ざしたものであり、人間認識に価値観点の自由の余地を確保するという戦略の重要な柱を構成している原理的な主張なのである。

複雑多様な現実の一面的認識において、知る

に値するものを選択する原理が、文化意義であり、価値理念である。「個性的實在の一部分のみが、われわれが当の實在に接近するさいの文化価値理念に関係しているがゆえに、われわれの関心を引き、われわれにたいして意義をもつという事情である。それゆえ、つねに無限の多様な個別現象の特定の側面、すなわち、われわれが一般的な文化意義を認める側面のみが、知るに値し、そののみが因果的説明の対象になるのである」（OE, s.177f. 87-88頁）。ここでも、「われわれ」が研究者を意味しているとしても、認識主体一般のような形式で述べられ、その個別性が強調されていない問題点が指摘できよう。また、ここに言及されている實在連関の無限多様性というヴェーバーが繰り返し主張する思想は、リッカートが「異質的連続性」と呼んでいる現実理解とさしあたりは同じ思想であるといえる（『文化科学と自然科学』s.51, 69頁）。この無限多様性という現実理解が持つ重要な意味とその問題性は、別に取り上げて検討課題とすべき点である。しかし、この問題は、後続予定の「その2」論文で主題的に取り上げることにして、ここでは、文化科学における対象選択の原理としての文化意義と価値理念の性格に注目して議論を進めることにする。

ヴェーバーは、次のように述べている。「いかなる文化事象の認識も、つねに個性的な性質をそなえた生活の現実が、特定の個別的関係においてわれわれにたいしてもつ意義を基礎とする以外には、考えられない。……それは価値理念によって決定されるからであり、われわれは、個々のばあいには、そのつどこの価値理念のもとに『文化』を考察するのである」（OE, s.180, 92頁）。

上の引用では、価値理念は、研究者が個人的

に抱く価値理念では必ずしもなく、文化現象が有している価値理念のゆえに、研究者の関心の対象となるという連関で語られている。つまり、対象が体現する価値理念によって、研究者の価値関心がいわば触発される関係にある。しかし、認識する主体者の側が有する価値理念や価値関心がこの触発に応答するという関係も指摘できるのであり、両者の関係は相互的である。次の言葉はこの意味でも注目される。「われわれ〈人間-佐藤〉は、人生において、人間協働生活の特定の現象を、この意味から評価し、そうした現象を意義あるものとして、それにたいして（積極的ないし消極的に）態度を決めるのである。そうした態度決定の内容がいかなるものであろうとも、—この現象が、われわれ〈研究者-佐藤〉にとって文化意義をもち、この意義によって初めて、その現象が、われわれの科学的関心を引くのである」（OE, s.180, 93頁）。研究者の認識関心は、その鋭さにおいては一般の人々と区別されるとしても、多くの人々が社会的に抱く価値理念や認識関心と重なる部分があるのは当然であり、またそうした社会的公共的な関心について研究者も共有しているということは通常のことであろう。認識主体が研究者個人ではなく、「われわれ」として一般的な表現で語られる理由も、この重なりを意識しているとも言えるだろう。とはいえ、このような、一般的な「われわれ」という表現の多用は、ヴェーバー本来の研究者個人の主体的価値選択を重視する思想をばかしてしまっていることは否めない。

しかし、さらに、『客観性』には、研究者自身の個人的人格が抱く価値理念に由来する認識関心の重要性についての主張も明確に確認できる。また、この点こそ、価値自由を唱え、研究

者個人の鋭い観点設定の必要性を重視するヴェーバーの思想にいつそう合致しているとも言えよう。ヴェーバーは、研究者個人が自分にとっての固有の問題を意識することの重要性を指摘し、研究対象の選択には、「一個の人格」が表明されていなければならないとして、研究における人格的要素を「文化科学研究の基本要素」とであると述べている（OE, s.181-2, 95頁）。こうして、ヴェーバーは、文化科学において研究者個人がいだく価値理念と価値関心の重要性を彼特有の勢いのある言葉で、明瞭に主張している。「研究者の価値理念がなければ、素材選択の原理も、个性的実在の有意味な認識もないであろう。またなんらかの文化内容の意義にたいする研究者の信仰がなければ、个性的実在を認識しようとするいかなる研究も端的に無意味であると同様、かれの個人的信仰の方向、かれの魂に映ずる価値の色彩の分光が、かれの研究に方向を指示するであろう」（OE, s.182, 95-6頁）。

こうして、ヴェーバーは、研究者の価値理念にもとづく个性的な関心を擁護するのみならず、むしろ、研究者の鋭い問題意識にねがず認識関心の重要性を強調するのである。この研究者の認識関心は、たしかに個人的な価値理念と信念に依拠しているが、同時に対象の側で、知るに値するという意味で、科学的な認識目標となるような意義を有している必要があるし、彼が抱く価値理念が対象の体現する価値理念と何らかの意味の関係を持つであろう。また、その選択が、知るに値するものである以上、広い意味で社会的な（われわれの）知的関心に答える内容を持たねばならないであろう。

こうして、文化科学における意義や関心についてのヴェーバーの論述を見てくるならば、研

研究者がその関心を触発される対象の側の特性や価値理念との関係でも、また彼が抱く価値理念や価値関心との関係においても、研究者の自由と個性発揮の重要性が強調されていることは明らかである。しかし、同時に、研究者の個性的な観点設定が社会的に意義ある認識に寄与しなければならないという意味で、その主観的観点はけっして無制約なものではないことがわかる。その意味で、研究者の主体性が主張されるからといって、研究者が任意に対象に意義を付与したり創造したりするというような関係が論じられているのではないことは明らかである。

このことを、示すものとして、ヴェーバーが、対象の価値理念と研究者が概念形成に当たって使用する価値観との関係を、理論的価値関係として明晰に自覚化するためのより詳細な踏み込んだ議論を行っていることを指摘しておかなければならない。ヴェーバーは、理念型概念の必要性が、文化意義を確定することと深い関係にあることを強調して、「歴史叙述における概念的要素を注意深く観察してみると、……歴史家は、……個性的な事象の文化意義を確定し、『性格づけ』ようと企てるや否や、ただちに、通例もっぱら理念型としてのみ鋭くまた一義的に規定できるような概念を用いて研究」せざるをえなくなると述べている（OE, s.193, 117頁）。ここでは、「文化意義を確定し、性格づける」とか、「文化意義を、鋭く一義的に規定する」と述べられていることの意味内容が重要である。それは、文化意義は研究者が研究対象に押しつけるようなものではありえず、むしろ、文化意義は、対象の意味として鋭く分析され確定されなければならないものであるということが含意されている。また、文化意義の分析が、理念型概念の形成にとって本質的な意味を

持っているということである。こうした、議論はリッカートには存在しないものであり、価値自由科学の方向で経験科学を前進させるために理念型概念を彫託しようとするヴェーバーにおいて初めて切り開いた方向性である¹⁷⁾。

ここでは、理念型概念の形成にとって「文化意義の分析」がどのような意味をもつのかについて、『客観性』論文でヴェーバーが論じている端的に分かり易い例を挙げよう。ヴェーバーは、「鋭い概念形成を怠ること」が、経済政策や社会政策をめぐる論議に「深刻な危険」を及ぼす、として、「農業の利害」という概念について、かなり長い詳細な説明を行っている（cf. OE, s.210-12, 151-56頁）。引用は省略するが、そこで、行われている議論は、「農業の利害」と言われている事態が、どのような錯綜する多様な階層の利害を内包しているのか、また、どのように多様な利害関心から農業が位置づけられ、とらえられうるのか、という「農業」とその「利害」をめぐる錯綜する諸価値関係の詳細な分析である。このような可能的価値関係の分析は、後の『マイヤー批判論文』では「価値分析」あるいは「価値解釈」という名称を与えられて主題的に論じられることになる。ヴェーバーは、この議論が、可能的「価値関係」の分析だということを明確に自覚している。「専門家なら誰でも、『農業の利害』という用語のもとに、互いに、交錯する価値関係の膨大なもつれ合いが、漠然と思ひ浮かべられていることを、知っているであろう」（OE, s.210, 152頁）。「ありうべきさまざまな観点を、明晰で鋭い概念によって確定することが、ここでの決まり文句の曖昧さを克服する唯一の道である」（OE, s.212, 156頁）。

この「農業の利害」にかかわる価値分析で

は、ヴェーバーは、農業に直接間接に実践的にあるいは経済的利害において関わっている諸階層の利害を詳細に例示しているが、同時に、直接的な農業関係者以外の人々の「異質な価値関心」についても論じている。たとえば、農業生産の増加についての関心における都市と農村および世代間の対立や、人口政策的関心と農業当事者との対立、農業と政治・文化の価値とを結びつける関係者以外の関心、国家利害と結びついた関心と国家利害それ自体への錯綜した関心、道徳や世界観と関連した関心などを挙げている。こうして「農業」や「農業の利害」という文化事象の可能な価値関係が、さまざまな実在的な社会的諸関係におかれた実践主体の農業への価値関心との関係で分析されている。こうして見てくれば明らかなように、研究者の価値観点の設定は、恣意的に行われるのではなく、客観的な実践的社會諸関係において形成されている客観的に意義のある無数の可能的価値観点を分析し、それらの相互連関を理解するとともに、そのうえに立って、特定の観点を選択する問題であることが分かる。もちろん、その選択に際しては、研究者は、自らの問題意識と価値理念にしたがって、主体的に自覚的に可能な限りの明晰さをもって、これを遂行しなければならないのである。

文化意義についてのいわば客観的に可能な様々な価値関係を理論的に分析するというヴェーバーのこのような方法論は、『マイヤー批判論文』では、ゲーテのフォン・シュタイン夫人にあてた手紙を例に、いっそう詳細に展開された。そこでは、この手紙が有している、ゲーテ理解に寄与しうる資料的意義、当時の文学や文化事象について何らかの有意義な知識をうるための認識手段としての意義、さらには、この手

紙自体が有する固有の価値についてのさまざまな価値解釈（Wertinterpretation）の可能性を挙げている（cf. KS, s.241-47, 139-148頁）。ヴェーバーは、対象の固有価値のさまざまな角度からの分析と解釈の可能性を示して、明らかにディルタイ的な文化の精神的な意味内容の解釈の思想を念頭に、「価値解釈」の意味を、次のような非常に幅広い意味で理解する。「解釈するというのは、解釈者自身の内面的生活や精神的視野を広げることを、彼が生活の様式のもろもろの可能性と陰影をそれはそれとして把握し考察し、彼自身の自我を知的に、美的に、最も広い意味で倫理的に、洗練させながら展開し、さらに彼の心の、いわば価値に対する感受性をいっそう鋭いものにしうる力を彼に与えるものである。精神的、美的もしくは倫理的創造の解釈は、ここではこの創造そのものが作用するのと正しく同じように作用するのである」（KS, s.247, 148頁）。このような価値関係の分析自体は、理論的なものであり、価値判断ではない。その意味で意味解釈、価値分析は、有意義な価値関係を発見し確定する価値関係のいわば「客観的可能性」の研究である。それは、しかし、豊かな文化内容の可能的意味に迫るものであり、ヴェーバーによれば、「経験的なものの思惟的取り扱いの限界に行き着くような研究」（ibid.）と特徴付けられるものである。

すでに、見てきたように、文化事象の価値関係は、複雑多様に錯綜する巨大な糸玉であり、その意味内容を理解しつつ、自らの文化理解の感受性を豊かにし、観点の柔軟性を鍛え¹⁸⁾、これらの可能的価値関係の錯綜を解きほぐして、対象の「本質（知るに値するもの）」にせまる研究者の努力が求められているのである。こうして鍛えられた観点からこそ、意義深い明晰な概

念が形成されるし、そうした研究を促進することがヴェーバーの文化科学と価値関係についての考察の真のねらいだったのである。対象が包蔵する可能的価値観の多様性を前提にすれば、対象に即して客観的な理論的態度で価値分析を遂行するとしても、研究者固有の価値理念や鍛えられた感受性によって選択される観点は、対象から一義的に与えられるようなものではなく、そこには、研究者の問題意識と固有の関心設定の余地が十分に確保されているのであり、恣意的ではない意味での真の研究の自由の空間が開かれているのである。こうして見てくると、研究者のいづく価値理念や価値関心について、ヴェーバーが、リッカートとは全く異なって、豊かな文化内容への関心を促進しながら、恣意を廃した価値関係の思想の経験科学における可能性を追求し、しかも自由な観点設定の確保のための道を開こうと、思考を重ねていったことがわかるであろう。

2-3. 時代の価値理念と問題設定の歴史の変遷

ヴェーバーの価値関係論は、これまでの考察で明らかになったような、文化諸事象の对象的客観的文化意義と研究者個人の鋭い価値関心の必要とそれら相互の媒介関係についての独自の理解に基づいている。しかし、研究者の価値観に関連して、ヴェーバーが行っている議論では、もう一つ重要な論点が残されている。それは、ヴェーバーが、研究者個人が抱く鋭い価値理念や価値関心の必要を論じつつも、さらに研究者個人を超える社会的な諸関係のなかで、科学的研究が営まれるという問題である。リッカートは、価値関係の背後に普遍的な価値体系を構想し、価値関係の普遍妥当性に認識の客観性の保証を求めた。しかし、ヴェーバーは、この

ような意味での普遍的価値や体系を明確に拒否し、研究者の個人的個性的な価値関心の働く余地を明確にした。そのうえで、ヴェーバーは、研究者の価値関心が、文化意義を有する対象が付帯している価値に制約されるだけでなく、「時代を支配する価値理念」に制約されている側面にも光を当てている。ヴェーバーの言う「時代の価値理念」は、リッカートのような普遍的で不動のものではなく、社会諸関係とともに対立をはらみ常に変化し変遷するものである。「なにが探求の対象となり、その探求が、無限の因果連関のどこまで及ぶか、を規定するのは、研究者およびかれの時代を支配する価値理念である」（OE, s.183-4, 99頁）。そして、この時代を支配する価値理念の変化は必然なのである。次の言葉は、よく知られている。「人間を動かす文化問題は、つねに新たに、異なった色彩を帯びて構成される。したがって、個性的なものの、つねに変わりなく無限な流れのなかから、われわれにとって意味と意義とを獲得するもの、すなわち『歴史的個体』となるもの、の範囲は、永遠に流動的である。歴史的個体が考察され、科学的に把握されるさいの思想連関が、変化するのである。したがって、人間が、常に変わることなく汲み尽くしえない生活について、精神生活のシナ人流の化石化により、新しい問題を提起することを止めないかぎりには、文化科学の出発点は、はてしない未来にまで転変を遂げていくのである」（OE, s.184, 100-01頁）。

この言葉は、当然だが、東洋的無常観のようなものを述べたものではまったくない。それはむしろ、科学が、その探求の歩みを続ける限り、常に新しい問いと課題に遭遇し、新しい解決を目指して認識努力が重ねられる、その限り

永遠に最終的な真理に到達することがない、ということを書いているのである。

しかも、興味深いことに、ヴェーバーは、この叙述にすぐ続けて、明らかにリッカートを念頭に、「諸文化科学についてひとつの体系を構想すること」について言及し、そのような試みが、「取り扱うべき問題と領域とを、確定的な、客観的に妥当する一体系に固定化する」ものであり、「それ自体、無意味な企てであろう」と述べている（OE, s.184, 101頁）。表現が適切かは問われる余地があるが、ここでいう「シナ人流の化石化」とは、新たな問いが生まれることなく固着し、一切の発展の余地が閉ざされる事態を意味する。そして、ヴェーバーのみるところ、この化石化は明らかにリッカートの価値哲学からも帰結するものである。上記の言葉は、ヴェーバーが、そのことについてあえて意識的に暗示的に言及したものと解しても、あながち曲解とは言えないと思われる。

この問題に関連しても、ブルーンの詳しい研究が参考になる。ブルーンは、ヴェーバーの1906年3月28日づけのゴットル宛の手紙から、次のような個所を紹介し、リッカートの普遍的妥当的価値の基礎付けの試みを、ヴェーバーが「流出論」とみなす手厳しい批判の言葉を記していることを紹介している。「流出論的倫理学の一貫した哲学擁護者たちは、必然的に、ある形而上学的な構築物に導かれていき、少なくとも、個人がそこに統合されてしまわざるをえなくなるような、理念性における価値が、絶対的なものだというような想定をせざるをえないようになる。—今や、リッカートもこれと同じ立場にたっているのである」¹⁹⁾。「流出論」にたいする批判は、ヴェーバーの価値自由科学構築の原点であり、「流出論」という批判の言葉は、ヴ

ェーバーにとって、ほとんど致命的な意味をもつ決定的な批判を意味している。

たしかにヴェーバーが見るとおり、価値が、万人の承認すべき普遍性において論証されたとしたら、論理必然的に、価値自由は意味を失い、歴史は終焉を迎えるだろう。同一の価値を万人が承認し、その価値に基づいて「同一の正しい認識」を万人が所有する社会など、ヴェーバーにとっては悪夢以外のなものでもないだろう。リッカートの形而上学を、弁証法的な対立を擁護する余地のあるヘーゲル主義的な流出論より悪質な流出論だと見抜いたとしても、ヴェーバーの立場からしてまったく当然のことなのである。

ヴェーバーにとって、万人が一致すべき認識の客観性を、よりによって自由たるべき価値領域に求めるなどということは決してありえない。それは価値自由論の侵害以外の何ものでもないからである。彼は、認識の客観性の根拠を価値から独立した事実認識の領域に求める。したがって、価値領域の主観性と価値理念の歴史的可変性を認めることは、むしろ科学の自由な発展可能性と、研究者の認識努力と観点設定の自由とを保証するものとなる。ヴェーバーにとって、価値の絶対的普遍性に科学的認識の客観性の根拠を求めることは、研究者の研究の自由をふさぎ、科学に「絶対普遍的認識」の僭称を許し、科学の化石化と死滅をもたらすものである。ヴェーバーは、リッカートの哲学的な観念論的関心とは異なって、明確に、「経験科学」的な実在論の立場に立って、社会科学の研究方法の彫琢を目指しており、一般的な価値関係論ではなく、価値関係論の合理的意味を救いだし、具体的な概念形成論に生かすことが彼の課題となっていたのである。

最後に、それだけではその根拠が不分明にも感じられる、科学を導く「時代の価値理念」が歴史的に変遷するといったヴェーバーの主張の合理的意味について検討しておこう。ヴェーバーは、その意味についてより合理的な論理を目立たない形で提出している。それは、科学が追究する「問題」の変遷という論理である。「問題論」的な論理は、上の『客観性』からの引用箇所を単なる科学の変遷という視点ではなく、「人間を動かす文化問題」の流動性の問題とみなすヴェーバーの主張に見いだされる。ヴェーバーは、価値理念の歴史的変化を、人々の実践的な課題や問題の変遷として、一種の実践的問題の歴史性の視点から理解しているのである。次のヴェーバーの言葉では、この論理がヴェーバー自身によって自覚的なかたちで簡潔に語られている。「諸科学の研究領域の根底にあるのは、『事象』の『即時的』連関ではなく、もろもろの問題の思想上の連関である。新しい、意味ある観点を開示するのは、新しい問題が、新しい方法をもって探求され、そうすることによって真理が発見されることにあるのである。そのばあいこそ、新しい『科学』が成立するのである」(OE, s.166, 64頁)。ヴェーバーが、科学は無前提ではない、と言うとき、たいてい、価値観の不可欠性が念頭に置かれている。しかし、科学的認識の営為は、解かれるべき問い、すなわち問題から出発しているのであり、多くの場合、問題はそれぞれの科学分野で共有され継承され共同でその解明に取り組まれている。研究者個人と社会的な価値理念を媒介しているのは、こうした共有され論議されている共同の「問題」なのである。ヴェーバーは、概念は、研究者個人が無から創造するものではなく、これまでの研究過程で鍛えられた財産を引き継ぎ、

問題の進展の中でその概念を批判し改良していく営みだという認識を、次のような表現で明瞭に語っている。「いかなる科学も、たんなる記述にのみ終始する歴史も、その時代が持ち合わせている概念を使用するものである。……われわれの言わんとすることは、人間の文化を取り扱う科学においては、概念の構成が、問題の設定に依存し、この問題設定が、文化そのものの内容とともに変遷を遂げるというこの関係からして、こうした[概念]総合のいかなるものも、暫定性をとみなざるをえないということである。われわれの科学の領域において偉大な概念構成の企てが価値をもったのは、通例、そうした企てが、その根底にあった観定の意義の限界を露呈する、まさにその点にあった。社会科学の領域における最大の進歩は、本質上、実践的文化問題の推移に結びついており、[先行する]概念構成の批判という形式をとるのである」。(s.202-3, 145-6頁) 知識論における問題論の重要性は、ポパーの思想においても重要なテーマである。ヴェーバーはここでポパー的な問題理解と同様の認識を示しているとも言える。また、このような概念形成の問題論的構図とその社会性、歴史性については、バスキアの批判的實在論も同じく共有している思想である²⁰⁾。いずれにしろ、以上の考察で、ヴェーバーの、文化科学と価値関係論の考察は、一見、哲学的にはリッカートの思想の経験科学への単なる応用のようにも見なされがちだが、その内実は、表面的な印象を遙かに超えて、独自であり、かつ発展可能性に富んだものだということが明らかにされたと考える。

3. 暫定的結論と次稿の課題

以上、本稿では、ヴェーバーの文化科学の議論における価値関係論が、リッカートの考案による概念であったことのために、また、一見したところ両者の意味内容の区別が明瞭でないことのために、文化科学や価値関係についてヴェーバーがリッカートに忠実に従ったかのような誤解を生み、その結果、ヴェーバーの多元主義的で実在論的な傾向を強く帯びた構想が理解されず、ヴェーバーの科学論がリッカート同様の主観主義的構成説を主張したものと見なされてきたが、そのような理解が、ヴェーバーの内在的な思想理解からどれほど乖離しているか、以上の考察から明らかになったと考える。また、ヴェーバーの価値関係論においては、認識する側の主観的価値観ならびに価値理念や価値への感受性が文化科学にとっていかに重要な役割を果たすかが明らかにされている。しかし、同時に、研究対象となる文化諸事象の文化意義ならびに文化価値については主観が恣意的に付与するようなものではなく、客観的な実践的な諸連関において構成されているものであるということが明確に自覚されていることも明確になった。こうしてヴェーバーは、対象の側が体现する多様かつ無数の諸価値については、研究する側が自覚的に価値解釈的方法を駆使して感受性鋭く分析する必要があることを、説く。しかし、この分析における認識主観の理念や感受性は、けっして実在連関の客観性を損ねるものではなく、むしろそれらを鋭く認識するための前提条件であるとともに、価値自由にもとづく研究の自由を保障するものである。認識観点の主観性は、恣意性を意味するものではなく、客観

的对象における諸価値に媒介され制約されるとともに、時代の価値理念、さらには時代の実践的諸問題への共同の取り組みという認識実践の社会性に制約されている。そして、このような認識を導く価値理念の性格のゆえに、科学は化石化することなく、永遠に歴史的に変化発展を遂げていく。この価値関係の変化の必然性は、人間の認識がつねに問題に制約された範囲でなされる認識であり、したがって可謬的で相対的なものであるとはいえ、そのことは、認識の客観性に背馳するものではなく、むしろ科学認識の歴史的発展に対して開かれた可能性を保障するものなのである。

およそ本稿「その1」論文では、以上のことが、明らかにされたと考える。ヴェーバーの文化科学論と価値関係論は、文化科学が価値に依存し価値に関係づけられて初めて十全に働くことを主張するものであるが、そこでは、この価値関係の主張と、社会科学認識の客観性の根拠をどこに求めるかという問題とは、リッカートと異なって明確に区別されているのである。ヴェーバーの場合、社会科学における認識の客観性の問題が明示的で直接の考察対象となるのは、もう一つの科学概念である「現実科学」の概念においてである。そこで、次稿「その2、現実科学と因果性」においては、「文化科学としての現実科学」の意味を考察し、現実科学において決定的な意味を持つ因果性理解と事実認識としての因果認識についてのヴェーバーの議論を主題的に検討することにする。そこでは、いっそう実在論的かつ多元主義的な存在論者としてのヴェーバー像が浮かび上がるはずである。

注

- ① 本稿では、頻繁に引用するヴェーバーの科学論に関するテキストについては、以下のような略号、略称を用いる。引用箇所等の参照指示については、本文中に、テキストの略号とページ数のみを記すこととする。

ヴェーバーの科学論関連文献は、Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 4. Auflage, J.C.B. Mohr, Tübingen, 1973 に所載の諸論文である。なお、同書所載の諸論文とその略記法、および本論文で使用した邦訳テキストとその略称は以下のとおりである（邦訳は、論文ごとに個別に出版されている）。

- 1, RK : Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie, 1903-06.
『ロッシャーとクニース』松井秀親訳, 未来社, 1988 (略称『ロッシャーとクニース』)。
 - 2, OE : Die >Objektivität< sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, 1904.
『社会科学と社会政策にかかわる認識の客観性』富永祐治, 立野保男訳, 折原浩補訳, 岩波文庫, 1998 (略称:『客観性』)。
 - 3, KS : Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaftlichen Logik, 1906
『文化科学の論理学の領域における批判的研究』エドワルト・マイヤー, マックス・ヴェーバー『歴史は科学か』森岡弘通訳, 所収 みすず書房, 1979 (略称『マイヤー批判』)。
 - 4, StU : R. Stammlers “Überwindung” der materialistischen Geschichtsauffassung, 1907.
『R. シュタムラーの唯物史観の「克服」』、松井秀親訳, 『世界の大思想 1, ウェーバー 社会科学論集』, 河出書房新社, 1982 (略称:『シュタムラー批判』)。
 - 5, SWF : Der Sinn der >Wertfreiheit< der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften, 1918
『社会学・政治学における『価値自由』の意味』中村貞二訳『世界の大思想1 ウェーバー・社会科学論集』出口勇蔵, 松井秀親, 中村貞二訳, 河出書房新社, 1982, (略称:『価値自由』)。
 - 7, WB : Wissenschaft als Beruf, 1919
『職業としての学問』尾高邦雄訳, 岩波文庫, 1987 (略称『学問』)
 - 6, SG : Soziologische Grundbegriffe, 1921
『社会学の根本概念』清水幾太郎訳, 岩波文庫, 1979 (略称『基礎概念』)
- ② 本論文は、長い間隙を置いてしまったが、2005年に本誌に掲載された下記拙稿論文の続編を意図している。そこで論じられている、私の「多元主義的存在論」の構想や、マルクス思想とヴェーバー思想との対話の意図、また、価値自由論を中心としたヴェーバー思想の世界観的な基本構造の理解については、本稿の前提となっている。本稿読者には、下記論文の参照をお願いしたい。
- 佐藤春吉「M. ヴェーバーの価値自由論とその世界観的前提—多元主義的存在論の視点による解説の試み—」(『立命館産業社会論集』第41巻, 第1号, 立命館大学産業社会学会, 2005年6月)
- ③ 前稿でも参照した、下記の向井守氏の著書『ウェーバーの科学論』における詳細な研究は、今次の私の研究にとっても引き続き重要なものであった。向井氏の研究成果、なかでも、ヴェーバーの社会科学における認識の客観性理解、特にヴェーバーの真理「整合説」から「対応説」への発展の理解、ヴェーバーとリッカートとの差異、デイルタイの解釈学のヴェーバー理解社会学にもった意義、ラスクの「流出論」と「非合理的裂け目」の議論にたいするヴェーバーの対応の意味、さらには、Hans Henrick Bruunの研究の重要性について、などは、私の実在論的ヴェーバー像の探求にとって非常に有意義な示唆となった。本稿では、上記論点に関連して、個別の箇所ですべて参照指示がない場合も、氏の研究成果から私なりの視点で学びとったことがらが反映されていることを、感謝とともに記しておきたい。
- 向井守『ヴェーバーの科学論—デイルタイからヴェーバーへの精神的考察—』ミネルヴァ書房, 1997年。

- ④ 社会学研究ではあまり参照されることが少ない、小倉志祥氏のヴェーバーの思想についての下記の哲学的研究は、私の多元主義的存在論的視点からのヴェーバー読解にとって、非常に有益であった。特に、文化科学、現実科学、了解科学、倫理学というヴェーバー思想の構成要素をあえて区分し、それぞれの知の性格とその哲学的基礎の違いと相互媒介関係に注目しながら考察した氏の研究は、性格を異にするそれぞれの知の性質とその存立基盤について検討し、ヴェーバーの知の構造理解を解明している点で教えられることが多かった。氏は、上記の区分を存在論的な区分とまでは明言していないが、存在論的な次元区分に基づいた科学分類としてヴェーバーを読み解く可能性を示したものとして、私には理解された。前稿でも、本稿でも、私のヴェーバー研究は、氏の研究から重要な示唆を受けた。特に、本研究における、文化科学と現実科学の性格理解については、氏の研究から示唆を受けた。私の学び取りは、個々の箇所でも参照指示する性格のものでは必ずしもないために、特に氏の著書への参照指示を行っていない。ここに、氏の研究の重要性について注意を喚起し、その恩恵にあずかった感謝を込めて、特に記しておきたい。

小倉志祥『M. ヴェーバーにおける科学と倫理』清水弘文堂、1971年。

註

- 15) 文化意義の内容に立ち入った分析の方法としてディルタイの解釈学的な理解の方法を意図的に取り入れ、自己の社会学の方法の骨格的な位置に据えたのはヴェーバーである。ヴェーバーのこの理解的方法への志向は、『客観性』論文の時にも既に現れているが、「クニース批判」論文で深められた。これに対して、リッカートは、ディルタイの文化客体の意味内容をなす素材的なものへの関心は薄く、ディルタイ的な「精神科学」や「心理学」的研究には冷淡であった。後に、おそらくヴェーバーに触発されて、解釈学を受け入れ、文化の素材の側面をとらえる文化科学論を展開するが、彼の関心はあくまで文化科学の認識論的構造としての方法論的形式の問題、究極的には価値哲学による基礎づけにあった。
- ヴェーバーがディルタイを受容し、意味理解の方法を独自に開拓していった経過の詳細は、向井守氏の研究が詳しい（向井守、上掲書）。
- 16) Hans Henrick Bruun, *Science, Value, and Politics in Max Weber's Methodology*, *New Expanded Edition*, Ashgate, 2007. p.143. なお、ブルーンは、ここで引用した、彼がNervi-fragment（「ネルヴィー・ノート断片」）と名付けているヴェーバーの手記から、これまで知られていなかったヴェーバーのリッカートへの批判的コメントなどを紹介している。ブルーンによれば、この手記は、1903年に、ヴェーバーが精神的な病の転地療養のためにイタリアのNerviの地に滞在していたときに書かれたもので、「リッカートの価値について」と表題が記してある。なお、ブルーンには、Nervi-Fragmentを中心に、ヴェーバーとリッカートの関係について重要論点をまとめた論文もある。H. H. Bruun, "Weber on Rickert: From Value to Ideal Type", *Max Weber Studies*, Vol1. No.2 (May 2001)
- 17) 理念型概念の案出と彫琢は、リッカートではなくヴェーバーのオリジナルであった。
- この点については、ブルーンが紹介しているヴェーバー自身の言葉が興味深い。
- ヴェーバーは、1904年7月17日づけのフォン・ベロー宛の手紙で、『客観性』論文がリッカートに負っていることを認める言葉の後に、「ただし、その最後の三分の一部分は例外だ。しかし、それこそ私がかつとも重要と見なしている部分なのだ」と記している（Bruun, p.211）。抽象的価値哲学ではなく、社会科学の独自の方法の探求と具体的展開を目指しているヴェーバーにとって、文化意義は形式的な問題ではなく内容的な問題であった。価値関係による認識関心の設定は、対象的な文化意義の分析と切り離すことができなかった。また価値自由な科学の概念論として独自に構想した理念型論にとって、文化意義の分析による観点設定の明

晰さは社会科学認識の客観性を担保する上では、欠かせない要件であったと言える。

- 18) 観点の柔軟性について、ヴェーバーは、対象に直接の判断を下すのではなく、対象がおびる固有な価値と意味について、観照的 (kontemplativ) な契機を含んだ理論的な価値解釈をほどこすことは、文化問題に対する研究者の理解力や評価能力を高めるだけでなく、視点変更の柔軟性を必要としているという側面をも強調している。
- 「歴史的評価 [理論的価値解釈のこと] の本質的内容は、我々のみた所では、可能的“価値関係”についての一つの“知”である。したがって、それは、対象にたいして、“立場”を少なくとも理論的に変更するという能力を前提とするのである」(KS, s.261, 1769頁)。
- 19) Hans Henrick Bruun, *Science, Value, and Politics in Max Weber's Methodology, New Expand Edition*, Ashgate, 2007. p.23.
- 20) 科学の発展を問題論の構造で理解する仕方は、ポパー的な問題理解と同様の認識を示しているとも言える。ポパーは、知識を解くべき問

題との本質的關係において理解する。カール・R・ポパー『果てしなき探求(下)』(森博訳)岩波現代文庫、第29章「問題と理論」(59-70頁)

また、このような概念形成の問題論的構図と認識概念の社会性、歴史性については、バスカーの批判的实在論も同じく共有している思想である。バスカーは、概念を知識生産の生産手段と見て、その社会性、歴史性、可謬性、意存性 (transitivity) を主張する。しかし、彼は实在論の立場から、認識対象の意識からの独立性=自存性 (intransitivity) を強調する。したがって、实在的对象は、設定された問題にたいして適合的に把握可能であると主張する。このような関係を彼は、存在論的实在論と認識論的相対主義 (ただし、これは認識の歴史的相対性を意味するもので、対象にたいする知識の適合性について判断できないという意味の「判断論的相対主義」ではない) の相補関係として考えている。詳論はできないが、この知識論の構図は、ヴェーバーと基本的に同型である。バスカー上掲『自然主義の可能性』64-5頁、同原文 p.57-8 参照。

Max Weber's Concept of Cultural Science (Kulturwissenschaft) and the Theory of Value-relation (Wertbeziehung) (2) :

The First Part of “Max Weber's Framework of Science Theory and the Concept of Ideal Type (An Re-interpretation from a Viewpoint of ‘Pluralistic-ontology’)”.

SATO Harukichi *

Abstract: This paper is the first part of a series of researches which aimed to make clear the meaning of the compositive framework of Max Weber's social science theory, and solve the ontological implications of his 'ideal type' theory from the viewpoint of 'pluralistic-ontology' conceived by the author. This series of researches is composed of three papers including this paper and two other papers which will subsequently be carried in this Review. This research about 'ideal type theory' follows on from my previous paper “Max Weber's Value-freedom Theory and the Premises of its View-of the-world” carried on this *Review* vol.41 no.1, in 2005. In this paper, from the view point of pluralistic-ontology, I focused specifically on Max Weber's concept of 'cultural science' and his value-relation theory to re-interpret and explicate their meanings. 'Cultural science' means a social science which focuses on the meaning and the value which the cultural phenomena contain. It is the concept of 'value-relation' derived from Rickert that works as the core significant notion in the cultural science. For Weber, the value-relation theory mediates between the subjective value idea of the researcher and the values of the objective cultural phenomena. In this paper, I clarified the difference of the meaning of the value-relation between Weber and Rickert. And I argued that the understanding of Weber's cultural science approves the unique ontological dimension of the value. But the other hand, he holds an idea that has an affinity to realism in empirical science which has independent criterion for objective knowledge. It is quite different from Rickert's idealistic value philosophy. The meaning of Weber's notion of 'cultural science' will be fully clarified when we understand it in relation to another scientific concept, 'real science (Wirklichkeitswissenschaft)'. This problem will be discussed in the following paper.

Keywords: Max Weber, Heinrich Rickert, Karl Marx, Ideal Type, Value-Freedom, Objectivity of Social Scientific Knowledge, Cultural Science, Value-Relation, Real Science, Causality, 'Pluralistic-ontology', Critical Realism

*Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University